

氏名	甲斐 万里子
ヨミガナ	カイ マリコ
学位の種類	博士 (音楽学)
学位記番号	博音第299号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	(論文) ピアニストの熟達化過程 —省察内容、演奏表現、レッスンに着目した縦断的な検討を通して—

論文等審査委員

主査	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	山下 薫子
副査	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	佐野 靖
副査	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	塚原 康子
副査	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	大角 欣矢

(論文内容の要旨)

本研究の目的は、ピアニストが熟達していく過程を、楽曲を仕上げる際の問題解決行動に着目して解明することである。そのため、1人のピアニストを対象に、研鑽を積む過程を多面的かつ縦断的に観察し、数ヶ月ごとに変化を捉えていくことで、ピアニストの熟達化の過程を構造化した。

研究対象者として、現在フランスに留学し、音楽院の伴奏科に在籍しながら、プロフェッショナルとしても活動する20代後半のピアニスト I (以下 I) を選出した。I が対象として適していると判断したのは、次の理由のためである。1) 作曲科で既に修士課程を修了し、専門的な知識を豊富にもつ I を対象にすれば、楽曲を仕上げるまでの試行錯誤の過程を、上述のような知識をどのように活用するのを含めて精緻に検討できる。2) I が日本で学んだ知識と、新たにフランスで学んだことがどのように作用し合いながら、I の表現が変化していくのかを、言葉の壁による影響がほとんどない状況で見られる。3) 高い楽曲分析の技能をもつため、楽譜に記された指示をどのように表現に反映させるかについて検討するのに最適である。

熟達化の過程を明らかにするには、I の内面での変化や、実際の演奏表現の変化の関係などを検討する必要があるため、多面的なアプローチが有効だと判断した。そのため、本研究では、1) 質問紙法、2) インタビュー法、3) 観察法を主に用いた。これらに加えて、4) 定期的な演奏の記録と、そこで記録した音源を用いた5) 専門家による評価を行うことで、I の学習の継続に伴って、演奏がどのように変化するのかを客観的に捉えた。

本論文は、4章構成となっている。第1章では、先行研究の知見を基に、まず、ピアニストの技能と、その技能を備える場であるレッスンとの関係を検討した。

第2章では、ピアニストの熟達化に伴って楽曲を仕上げる上での課題を解決していく手立てが、どのように変化するかを明らかにした。「練習ノート」から特定の楽曲を仕上げる過程での手続きの変化を捉え、専門家による評価の結果に基づいた演奏表現の変化から、両者の関係を検討し、ピアニストが一層優れた演奏を行うようになることと、楽曲を仕上げる手続きとの関係を明らかにした。

第3章では、ピアニストが楽曲を仕上げる過程において新たな課題を発見する段階に着目し、ピアニストの新たな課題の発見がどのように促されるのかを、1) レッスン、2) 過去のレッスン、3) 多様な実践という3つの視点から明らかにした。I が現在師事している指導者3名それぞれのレッスンを受けたことがある《喜びの島》を練習する過程を対象とし、ピアニストの新たな課題の発見にレッスンが果たす役割を考察した。

第4章では、楽譜からより多くの情報を読み取ることを可能にするピアニストの「熟考性」を支える視点を明らかにした。そして、その「熟考性」が卓越したテクニックによる自動化した処理とどのような関係にあるのかを、練習時の課題の変化に着目して解明した。

結果として、ピアニストの熟達化について次の3つの結論が導き出された。

1. レッスンでの指導は、学習者に強い内省および素朴な問いをもたらし、そのことは、学習者が既に学んだことやあらゆる体験に新たな意味を見出し、本質的な課題を発見することを促す。
2. 学習者が、理論と自分の感受性との往還から納得して捉えた作曲家や楽曲の特徴を、細部まで表現に反映させることが、ピアニストそれぞれの独自性ある表現の創造につながる。
3. 表現を決定する際に、既に備えた知識や技能による自動化された処理がもたらす近似的な表現に気づき、修正する手立てを備えていくことが重要である。

既に一定の知識や技能を備えたプロフェッショナルのピアニストの、さらなる熟達化を支える重要な技能として抽出されたものの全てに、理論と自分の感受性との両方に徹底的に向き合い、いずれの観点から考えても矛盾のない表現を追求する姿勢が関係していた。

レッスンの観察、自己評価やインタビュー、そして、専門家による評価という多面的なアプローチをとる本研究は、熟達を目指す学習者の姿勢が、新たな観点を獲得し、課題を発見することや最適な表現への到達を促すことを明らかにした。

熟達化は取り組む課題の文脈に強く依存しており、ピアニストの素朴な問いから始まる試行錯誤の過程で、身体を用いた演奏表現というきわめて具体的な形で解が見出される。本研究には、これまでの理論的枠組みでは捉えきれなかった、試

行錯誤と解の発見との関係およびその過程を詳細に示すことができた点に意義がある

本研究においては、対象を1人とし、また、作曲家でもあるピアニストに限定していた。そのため、演奏表現における独自性と、問題解決の視点や手続きとの関係がどこまで普遍的であるのかについては、本研究の範囲内では答えることはできない。今後は、学習経験や練習時の実践が異なるピアニストを対象に加えるなどして、より精緻なピアニストの熟達化の構造の解明を目指したい。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、1名のピアニストが「独創的な表現」を実現させる過程を研究対象として、質問紙法やインタビュー、観察法などの方法を用いながら、その熟達化を構造的に説明しようとしたものである。

演奏の独創性については、作曲家の意図と楽譜、そして演奏家との関係から、音楽学の分野で議論が続けられているところである。また、演奏家の熟達化については、主として音楽心理学の分野で研究されており、熟達者と非熟達者の比較を通して両者の相違点が明らかにされつつある。さらに、演奏家の熟達化におけるレッスンの役割については、著名なピアニストの弟子に対するインタビューなどによって、その師弟関係に着目した研究が行われている。そのような中で、本研究は、演奏家の創造性の発露を重視する立場をとりながら、1年以上の期間にわたって1名のピアニストに密着し、その演奏と内面的な変化、他者との影響関係などを多角的に探ろうとしている点に、オリジナリティが認められる。

本論文は次の4章からなる、先行研究の検討(第1章)、演奏解釈の方略とその変化(第2章)、課題の発見とレッスンの影響(第3章)、独創的な表現を実現させるための「熟考性」と演奏技能における「自動化」の問題(第4章)。第1章では、申請者自身の修士論文を含めた先行研究をふまえて、本研究の論点を明確化した。第2章では、練習ノートの分析を通して、楽曲に取り組む方略の変化をとらえるとともに、演奏録音の第三者評価を通して、優れた演奏と方略との関係を明らかにした。第3章では、3名の指導者によるレッスンを分析することにより、レッスンが演奏者の解釈や表現、方略に関する思考の視点を増やし、本質的な問いの発現を促していることを明らかにした。第4章では、特に表現意図と技能との関わりを視点として、独創的な表現を生み出す「熟考性」の実態を浮き彫りにするとともに、卓越したテクニックにおける「自動化」の役割と危険性について指摘した。そして、これまでの成果をまとめる形で、ピアニストの熟達化過程をモデル図として示している。

本研究の意義は、次の2点に集約されるだろう。1. 独創的な表現をめぐって演奏家の内面に生じている葛藤やひらめきなどを生き生きと描き出した点。2. 質問紙やインタビューに留まらず、日常的に記録された練習ノートやレッスンの分析も行い、専門家による第三者評価を併せて実施することで、実証性と客観性を担保する手法を追究した点。もっとも2点目については、研究者の飽くなき要求に対して真摯に向き合い続ける演奏家の存在なくして実現しえなかったことは、言を俟たない。

審査会では、次のような課題が指摘された。1. 協力者が質問紙やインタビューに応じることで、通常環境ではあり得ない課題解決の様態が発生した可能性があること。2. 「読譜」というカテゴリーが、「演奏の独創性」とどのような関係に置かれるのかについて明確ではないこと。3. 心理学や教育学、その他の用語について、さらなる吟味が必要であること。4. 結論に普遍性を付与するため、より幅広い対象者を含めて研究を拡大する必要があること。

こうした課題が残されてはいるものの、本研究の成果は、音楽教育学のみならず、心理学における熟達研究や音楽学におけるオーセンシティに関する研究などに対しても貢献し得るものと考えられ、課程博士として優れた成果を上げたことと判断し、合格とした。